

創造的読書のパターン・ランゲージ： 本を読むことについての言葉

尾郷 彩葉^{*1}，木村 紀彦^{*2}，井庭 崇^{*1}，渡辺 泰^{*3}

^{*1} 慶應義塾大学総合政策学部

^{*2} 慶應義塾大学政策メディア研究科

^{*3} 株式会社有隣堂経営企画本部社長室室長

Abstract

本論文では、本を読むことについての経験の共有や対話の機会をつくる方法として、「創造的読書のパターン・ランゲージ」を提案する。このパターン・ランゲージは、読書のコツ、読書の楽しみ方、創造的な読書の3つのカテゴリーに分かれた27のパターンで構成されている。「読書のしかた」についての言葉（ランゲージ）があることで、読書の方法や経験についてのコミュニケーションの機会や、本との接しかたのアプローチを増やすことが可能になる。本論文では、3つのカテゴリーについて論じながら、読書を様々な角度から捉えるための27の言葉を紹介する。また、図書館総合展で開催したワークショップにおける活用についても取り上げる。

1. はじめに（読み方の多様性）

「読書」という言葉から、どのようなイメージが浮かぶだろうか。「はじめから終わりまで読まなければいけない」、「内容をしっかり理解しないといけない」、「マジメに座って読まないといけない」というのが一般的なイメージではないだろうか。しかし、読書について語られていることに目をむけてみると、もっと多様な「読書のしかた」が見えてくる。

例えば、思想家の三木清は自身の読書法について次のように語っている。

「私はずいぶん勝手な読み方をする。少し読んでみて面白くないと遠慮なく放り出してしまふ。或いははじめから読み、或いは中程から読み、或いは終わってから読む。そして面白いと思うと、通読する。また必要なものだと思うと、他日のためにその本の名を記憶しておく。読む場合も読む時間も一定していない。或いは腰掛けて読み、或いは寝転んで読み、或いは立って読む。」（三木、2017、p.34）

はじめからだけでなく、途中から、あるいは終わりからも読むし、つまらなければ読むのを止めて放り出してしまう。座って読むだけでなく、寝ながらも読むし立ちながらも読む。一人の読書のしかたをのぞいてみるだけでも様々なようだ。あるいは、読む場所の多様性について語っている人もいる。

「私がいちばん読書をする場所はどこかと言えば、仕事部屋にある赤いソファかベッドになるだろう。そのほか、パソコンの前でイスに座っても読むし、リビングのソファでも読む。食事をするテーブルでも読むし、トイレ、風呂のなかでも読む。」(岡崎、2014、p.34)

とりわけ、ある場所で読書をすることの楽しみを強調する人もいる。

「とくに、バスの一人掛けの席に座っての読書、あれは最高だ。その席が、運転手のすぐうしろの、つまり最前列の席だったりしたら、うん、もう、この世の天国だよ。バスが来て、とんとんと乗りこんでって、その席があいているのを発見したときの喜び！あれにかわるものはない。」(青山、1997、p.57)

読書への向き合い方についても、様々なことが語られている。例えばドイツの哲学者アルトゥル・ショウペンハウエルは、読書とは「他人にもものを考えてもらうこと」であると考え、次のような忠告をしている。

「ただ読書にいそしむかぎり、実は我々の頭は他人の思想の運動場にすぎない。そのため、時にはぼんやりと時間をつぶすことがあっても、ほとんどまる一日を多読に費やす勤勉な人間は、しだいに自分でももの考える力を失って行く。」(ショウペンハウエル、1960、p.128)

ショウペンハウエルは、精読をして熟慮を重ねることで本を自分のものにするということが大切だと考え、むやみに多読することを戒めている。一方で、まったく逆の読書のしかたを述べている人もいる。例えば思想家の浅田彰は、1 ページ 1 時間のペースで「深読み」することよりも「ツマミ食い読書」を勧めている。

「あくまでツマミ食いでいいんだよね。(中略) ハイデガーが森に隠棲して推敲を重ねて書いた本だからといって、電車のなかで拾い読みして悪いことはない。マルクスの『資本論』なんて、どう見ても寝ころがって読むようにできている。しかも、そうやって拾い読みすると実に面白いんだな、これが。」(浅田、1984、p.223)

丁寧に通読することよりも、本を「道具箱として自由に使う」楽しさを強調している。著者の意図したとおりに内容を理解するだけでなく、自分なりに面白さを見出して自由に使ってしまう方がいいということだ。

また、必ずしも本に書かれている内容を知るために読むことだけが読書ではないようだ。例えば社会学者の大澤真幸は、本や論文を書き上げることができるか不安になったとき、特別に気に入っている本を読むことで、不安を克服していたと語る。

「かつて自分に混じり気のない感動を与えてくれた論文や本の中から、何か一つを選び、読んでみる。これから書こうとしている論文の主題と関係があるテキストである必要はない。また、全部、読む必要もない。お気に入りの論文や本の、特に好きな一部を、数項ほど読めばよい。すると、私の中で清新な感動が再現される。私を〈書くこと〉へと駆り立てた、あのわくわくする気持ちが、甦ってくるのだ。」(大澤真幸、2017、p.280)

これから行う自分の執筆活動のための勇気をもらうために、本を読んでいるということである。

そして、極端に言えば、本は読まなくても楽しむことができる。改めて三木清の読書法をみると、次のように語っている。

「忙しくて読むひまのない時には、書庫に入っているいろいろな書物を取り出してただその背を撫でてみる。それだけでも私には十分楽しいのである。」(三木清、2017、p.34)

本は、中身の文章を読むだけでなく、表紙や手触りなどのデザインも含めて楽しめるものであるということだ。

このように、「読書のしかた」というのは実に多様だ。なんのために読むか、どのように読み、どのように楽しむか、というのは様々であり、人によって異なる読書の経験をしているはずである。しかし、このような読書の方法や経験の多様性に比べて、そのことが語られる機会は少ないのではないだろうか。何を讀んだか(対象)、どう理解したか(内容)、どれだけ讀んだか(量)、ということはよく語られるが、いかにして讀んだか・楽しんだか(方法)ということが語られることは、あまりないのが現状だ。

本論文はこのような問題意識で、多様な本の読み方や楽しみ方を捉えるための「中空のことば」(井庭・梶原、2016)として、「創造的読書のパターン・ランゲージ」を提案する。「読書のしかた」についての言葉(ランゲージ)があることで、読書の方法や経験についてのコミュニケーションの機会や、本に触れる機会をつくるためのアプローチを増やすことが可能になる。

本論文で提案する 27 のパターンは、「読書のしかたを創造的につくっていくための言葉」である。読書のコツ、読書の楽しみ方、創造的な読書 3 つのカテゴリーに分かれている。以下では、それぞれのカテゴリーについて論じながら、読書を様々な角度から捉えるための 27 のパターンを紹介する。また、図書館総合展で開催したワークショップにおける活用についても取り上げる。

2. 創造的読書のパターン・ランゲージ

本論文で提案する「創造的読書のパターン・ランゲージ」は、「読書のしかた」をパターン・ランゲージ (Alexander, et al., 1977) の手法を用いて言語化した 27 のパターンで構成されている。パターンは 3 つのカテゴリーにわかれており (図 1)、それぞれの観点から作製されたパターンが読書のしかたを創造的に作り、生活の中で実践していくことを支援する。

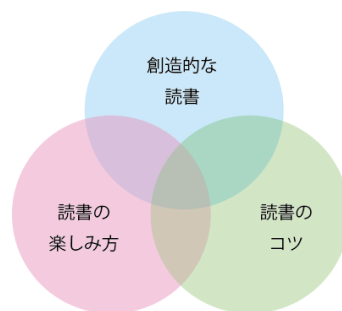


図 1 創造的読書のパターン・ランゲージの 3 つのカテゴリー

社会学者のニクラス・ルーマンは、「社会はコミュニケーションの連鎖によって成立しており、社会を変えるためにはコミュニケーションを変えなくてはならない」と唱えている (ルーマン、1995)。教育的な面では、学校や図書館などが主体となって読み聞かせや読書週間などを行ったり、法律が制定されたりなど、これまでに様々な読書推進活動が進められてきている。また、2017 年現在、インターネット上でのレビューや SNS を通じた本の紹介など、本そのものにまつわるコミュニケーションは活発になっている。しかし、読書行為や本を読むことについての考え方そのものに関するコミュニケーションは、なかなか起きていないのではないだろうか。その理由として、読書について語るための言葉が不足していることが挙げられる。例えば編集者である松岡正剛は、読書術についての著書の中で、次のように述べている。

「いちばん厄介なのは、読書のプロセスは外からなかなか覗きにくいということなんです。マルセル・デュシャンは、『人が何を見ているかは見えるが、人が何

を聞いているかは聞こえない』と言ったけれど、『人が何を読んでいるかはわかって、人がどのように読んでいるかはわからない』といったところがあるんです。」(松岡、2009, p.8)

読書のしかたは、個人の経験としてとどまっており、他者にはひらかれにくいという現状があるようだ。そこで私たちは、日ごろの読書の頻度に関わらず、30名ほどにインタビューを行い、普段実践している読むときの工夫や楽しさを感じる瞬間、こだわりのポイントなどを掘り起こし、パターン・ランゲージの作成プロセス(Iba, 2016; Iba & Isaku, 2016)を用いて、読書のしかたについての27のパターンを作成した(図2)。また、今回作製した27パターンは、普段あまり本を読まない人が気軽に一步を踏み出すことができるようなきっかけをつくることを目的としているため、特に読書をする際に陥りがちな問題を解決し、内容を読むだけではない本の楽しみ方、そして創造メディアとしての使い方を伝える入り口となる要素を抽出している。そして、文章自体も短くまとめることで、読むという行為に苦手意識を持っている人にとっても読みやすいように工夫した。

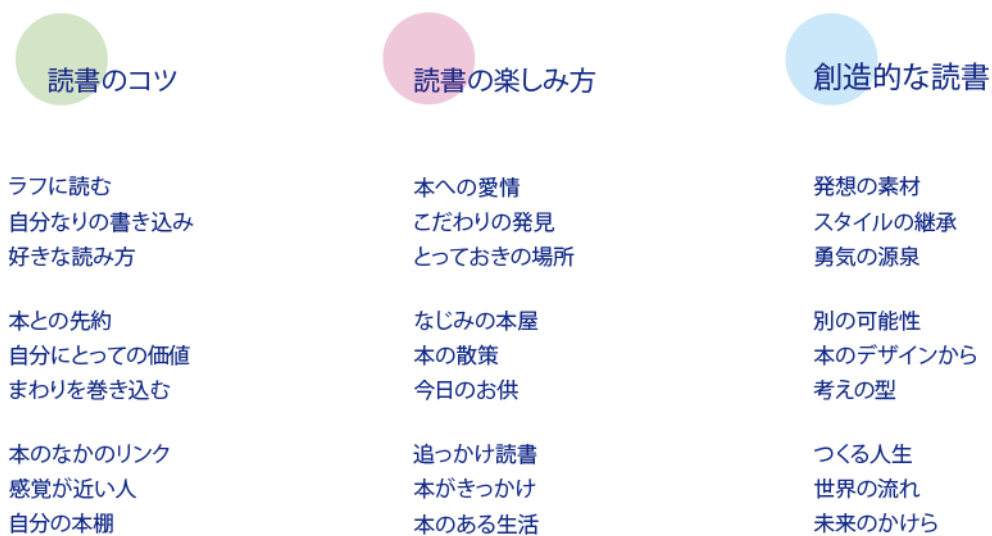


図2 創造的読書のパターン・ランゲージの27ワード一覧

読書のしかたを指し示す言葉ができることによって、自身の経験と照らし合わせたり、取り入れて実践してみたりするための「認識のメガネ」(井庭ほか、2013)として用いることができるようになる。

また、3つのカテゴリーに分けることにより、本をどのように読めばよいのかわからないという悩みを解消するということだけではなく、人それぞれの本の楽しみ方や、本の中身から学ぶだけではない本の活用のしかたなどについての語彙を増やすことができる。

「読書術というのも単純じゃないほうがいい。むしろいくつもの方法を知って、それらを複合させたり、取捨選択したり、またそのためのエクササイズやワークショップがあってもいいほどの、そのくらいにプロユースなことでもあるんです。ほんとうは、スポーツやピアノや歌舞伎のように複雑で、だからこそおもしろいものなんです。ところが、これまで読書術や読書法は、よくあるような難解な内容課題と単純な速読術のようなもの以外には、まったく顧みてこられなかった。

これからの読書論は『方法としての読書』として提案されていくべきものです。みんな本の中身、内容に入ったかどうかということばかりを、問題にしすぎている。読書感想コンクールなども、そういう傾向に陥りすぎています。

その本を喫茶店で読んだとか、冬の寒い夜に読んだとか、タイトルに痺れたから読んだとか、そういうことも入れていい。ですから、そういうようなことでいいますと、『読書の醍醐味』というのも、それ自体をいろんな角度から説明すべきなんですね。」(松岡、2009、p78-79)

本をきちんと読み通したり、作者の意図を捉えたりすることが重要な場合はもちろんある。しかし、それだけが読書の魅力なのだろうか。読書のしかたは、読むタイミングや場所、向き合い方など十人十色である。そのような多様性を捉え、異なる観点から作製した27の言葉は、「対話のメディア」(Iba, 2013)として一人ひとりの読書の体験を語り、他者と共有することを支援する。その結果、これまであまり知る機会のなかった読書や本へのアプローチを実践することができるようになる。

2-1. うまく読書をするためのパターン

この節で紹介するパターンは、本を読むのが苦手という人や好きではない人がよりよく読書に向き合うためのコツに焦点をあてている。「最初から最後まできちんと読まなければいけない」、「正しく作者の意図を捉えなければいけない」、「本を読む時間がとれない」といった、特に読書をする際の問題となりやすい悩みを解決するためのコツを共有することを目的として、9つのパターンを作製した。

1. ラフに読む(図3)

本を読むとき、最初から最後まで読み通そうとすると、途中で挫折したり、読み切る自信がないために読み始めることさえできなかつたりすることが、しばしばあります。そこで、**文章のおおまかな流れをつかみながら、重要そうな文章や箇所を拾い上げるように読み進める**ようにしてみます。細部にこだわるのではなく、自分が大切だと思う部分に注目するのです。必要な箇所はあとから再読することもできます。そのように本と向き合うことで、ラフに読みながらも、本全体の内容をつかむことができるようになります。



図3「ラフに読む」

2. 自分なりの書き込み（図4）

読書をしていると、さまざまな気づきや感動を得ることがあります。しかし、そうした発見は瞬間的なものなので、つかみ損ねてしまったり、時間が経つと忘れてしまったりするものです。そこで、**本を読むときには鉛筆やペンを持つようにし、重要だと感じたところに線を引いたり、考えたことや感想を余白に書き込んだりする**ようにします。

読んでいるときに自分の思考の跡を本に残すことで、考えを整理して深めながら読み進めることができます。また、読み返したときに自分が重要だと思った箇所を見つけやすくなったり、自分の考えの変化に気づけたりするようになります。



図4 「自分なりの書き込み」

3. 好きな読み方（図5）

座って静かに本を読んでいると、同じ姿勢で疲れたり、眠くなったりして、はかどらないことがあります。集中できる読み方は、人によって、あるいは、その時々状況によって異なるものです。そこで、姿勢や環境を変えて、自分が心地よく読めるスタイルで読むようにします。座って読むのではなく、**立ちながら読んだり、横になって読んだり、あるいは、音楽を聴きながら読んだり、場所を変えて読んだり**します。そうやっていろいろな読み方のスタイルを自分のものにすることで、本を読むことができる場面が増えていきます。



図5 「好きな読み方」

4. 本との先約（図6）

日々の生活のなかで、本を読む時間がなかなか取れないという人は多いかもしれません。読もうと思っている本があっても、他の予定に押されて後回しにしていまいがちです。そこで、**本を読む時間を自分のスケジュールに組み込み、手帳にも書き込みます**。本を読むことを、他のやるべきことと並んだひとつの先約として捉えることで、本を読む時間が確保できるようになります。



図6 「本との先約」

5. 自分にとっての価値（図7）

目の前のやらなければならないことに追われていると、読書は後回しになってしまいがちです。本を読んでもすぐに何かが変わるわけではないからと、読書を後回しにしていると、長期的な観点で成長の機会を逃しているかもしれません。

そこで、**読書はこれからの自分を形づくるために不可欠なものであると捉え、読書の時間を確保する**ようにします。本から得られるものは、読んだ量や積み重ねによって、時間をかけて熟成されていくものです。自分にとっての長期的な価値を意識できるようになると、忙しい日々のなかでも読書の時間を大切にすることができるようになります。



図7 「自分にとっての価値」

6. まわりを巻き込む（図 8）

読書の時間を大切にしたいと思っても、どうしても他の予定に流されてしまうことがあります。特に、難しい本の場合には、読むのに時間がかかってしまい、理解が進まないまま途中で投げ出してしまいがちです。そこで、自分が読もうとしている本に興味がある人を探したり、増やしたりして、**その本を読んで一緒に語り合うという機会をつくれます。**誰かと一緒に読むということになれば、いつまでに読まなければならないのかが明確になり、その本を読み終えるまでの見通しが立ちます。さらに、わからない部分については一緒に話し合うことで、内容の理解も深まります。



図 8 「まわりを巻き込む」

7. 本のなかのリンク（図 9）

これから読む本を探しているときに、何を読めばいいか迷ってしまうことがあります。山ほどある本の中から、自分にとって意味のある本を探すのは難しいかもしれません。そこで、**本のなかで紹介されている本や人の情報をもとにして、次に読む本を選びます。**いわば、「本のなかのリンク」を辿っていくのです。そうした本の多くには、自分が読んだ本との関係性が見えやすかったり、共通の魅力が潜んでいたりするため、自分に合う本に出会うことができるのです。



図 9 「本のなかのリンク」

8. 感覚が近い人（図 10）

これから読む本を探しているとき、たくさんの本のなかから、自分が気に入るような本を探すことは難しく思えます。そこで、「面白い！」と思う感覚が自分と近い人を見つけ、**その人が読んでいる本やオススメしている本を読んでみます。**そうすることで、自分では手に取ることがなかった本とも出会うことができ、自分の世界が広がります。たとえ自分と関心領域が異なる人でも、面白いと思う感覚が近ければ、自分もその本を楽しむことがで

きるものです。



図 10 「感覚が近い人」

9. 自分の本棚（図 11）

気になる本を見つけても、「すぐには読まない」と思うと、その場では買わずにいることがあります。しかし、あとで欲しいと思っても、その本がすぐに手に入るとは限らず、そもそも欲しいと思ったことすら忘れてしまうこともあります。そこで、**気になった本はその場で手に入れ、自分の本棚に並べておきます**。本棚は、読み終えた本を並べておくだけの場所ではありません。**これから読む本や、いずれ読みたい本も並べておく**ことで、それらの本といつでも出会うことができるようにするための場所なのです。そうやってつくる本棚は、自分なりの世界観が宿る唯一無二の場所になります。



図 11 「自分の本棚」

2-2. 読書を楽しむためのパターン

この節で紹介する 9 つのパターンは、本の中身を読むだけでは本や読書のよさを十分に味わうことができず、退屈に感じてしまい、本との距離がなかなか縮まらないのではないかという問題に対して、個人が普段の読書のなかで楽しんでいることや、本に対して抱いている想いを言語化している。本の楽しさや魅力を伝えることを中心においたパターンであるため、その楽しさを損なわないようにパターン内ではあえて問題を明記せず、この「カテゴリーにある 9 つのパターンが「本に触れる機会が生まれにくい」という問題を解決するためのものとなっている。

1. 本への愛情（図 12）

本には、そこに書かれている内容だけでなく、**物としての魅力**もあります。ページの質感や紙の匂い、重みなど、いろんな感覚を通じて得られる楽しみがあるのです。そうした楽しみから、本を好きになっていくことがあります。さらに、**好みのブックカバーやしおりで彩**ると、本そのものにいっそう愛着がわいてきます。すると、本を手にするたびに、ちょっぴり幸せな気持ちになれるのです。



図 12 「本への愛情」

2. こだわりの発見（図 13）

本のつくり手は、ときに想像を超えたつくり込みをしています。あえて違う読み方でルビを振ったり、装丁まで著者が手がけていたり。そんな、さりげないけれど奥深いこだわりのポイントに気づけた時には、思わず感嘆してしまいます。「ここまでするか!」と思わせる、**つくり手のこだわりを見つける**と、つくり手への尊敬が増し、その本を持っていることの喜びもより大きくなります。



図 13 「こだわりの発見」

3. とっておきの場所（図 14）

自分が持っている本の中で、ひと際大事にしているものがあります。初めて買った本、恩師からもらった本、好きな作者のサイン本など。そんな特別な本は、**飾る場所も特別に演出**したいものです。例えば、本棚の一番目立つ場所に置いたり、部屋のインテリアとして飾ったりします。普段から見やすいところに好きな本が置いてあると、目にはいるたびに幸せな気持ちになります。



図 14 「とっておきの場所」

4. なじみの本屋（図 15）

読書を楽しむためには、本との出会いの場が大切です。自分の感性に合うセクションがある本屋さん、惹きつけられるポップが並ぶ本屋さんなど、お気に入りの本屋さんが見つかると、魅力的な本と出会う機会が増えます。そして、**素敵な本に出会えるという期待感**を持っていると、本屋さんに行く時間や道のりが、胸がはずむ楽しい時間になるのです。

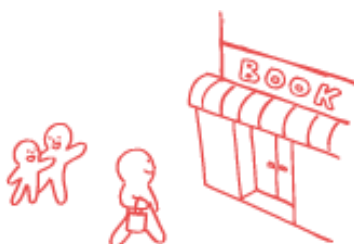


図 15 「なじみの本屋」

5. 本の散策（図 16）

本屋さんは「本を買う場所」であると同時に、「**たくさんの本の棲家**」でもあります。**森の木のようにずらりと並ぶ本を眺める**ことは、それ自体が楽しいことです。たとえば、季節に応じて出てくる旬の本に目を向けてみたり、今まで足を踏み入れたことのないコーナーに立ち寄ってみたり。棚のちょっとした変化に気づくことや、思いもしなかった本に出会えると、それだけでうれしくなります。そうやって出会った本は、結局、家に連れて帰りたいくなるものですけどね！



図 16 「本の散策」

6. 今日のおとも (図 17)

本は、読むときだけでなく、選ぶときにも楽しむことができます。**その日の自分の気分を
考えて服を選ぶのと同じように、本も選びます。**ご機嫌に過ごしたいからお気に入りの小説、知的に過ごしたいからちょっと難しめの本というように。そうやって選んだ本は、その日のパートナーです。その本が手元にあるだけで、1 日を楽しい気持ちで過ごすことができます。



図 17 「今日のおとも」

7. 追っかけ読書 (図 18)

本の内容が、共通の話題になることがあります。一緒に盛り上げたい友だち、なんでも知っている先輩、尊敬する先生。**その人と話すために、その人が読んでいる本を自分も読んでみる**というのは、読書のひとつのきっかけになります。以前の自分には語れなかったようなマニアックな話にもついていけたら、その人に少し近づけた気分になります。本は、読むときだけでなく、読んだあとにその本について語り合うことも、ひとつの楽しみなのです。



図 18 「追っかけ読書」

8. 本がきっかけ (図 19)

本のなかには、美味しそうな料理が出てきたり、魅力的な場所が出てきたりするものです。主人公が食べていたあの料理を実際に味わってみたい！舞台となったあの場所に行ってみよう！本がきっかけとなって、**その料理をつくってみたり、その場所に行ってみたりすることは、自分の世界と本の世界が重なり合う特別な体験となります。**



図 19 「本がきっかけ」

9. 本のある生活（図 20）

本は、**先人たちが時間をかけて生み出してきたもの**を、私たちのもとに届けてくれます。私たちは自分の生活を送りながらも、本を通じて、遠く離れた時代や全く異なる世界観に触れることができます。それは、本という形で残され、届けられてきたからこそその出会いなのです。そのように捉えてみると、いま自分がその本を手をしていることは、ちょっとした奇跡と言えるかもしれません。**そうした奇跡を味わう**ことが、「本のある生活」なのです。



図 20 「本のある生活」

2-3. 読書を創造につなげるパターン

この節で紹介するパターンは、これからくるであろう「創造社会」（井庭ほか、2013）における読書のあり方を言語化している。人々がいろいろなものを創りながら生きる創造社会において、「自分の創造的活動のために、本の力を借りる」という、ただ読むだけではないこれからの創造的な読書についての 9 つのパターンを作製した。2-2 節の読書を楽しむためのパターンと同様に、この 9 つのパターンそれぞれが「本を単なる伝達メディアとしてではなく、創造メディアとして使う機会を逃してしまう」という状況に対して解決策を提示している。

1. 発想の素材（図 21）

何かをつくっているときに、いまいち新しさや深みが足りないと思うことがしばしばあります。そういうときは、本を手にとりパラパラとめくって眺めてみたり、関係のありそう

なところを読んでみたりすることで、新たなアイデアや発想につながることがあります。
本に書かれている内容を理解するために読むのではなく、自分がいま取り組んでいること
 に対する**発想を得るために読む**のです。これが、「発想の素材」として本を捉えるという、
 創造的読書の基本の考え方です。



図 21 「発想の素材」

2. スタイルの継承 (図 22)

やわらかい感じの文章が書きたいとか、勢いのある絵を描きたいというときに、その雰囲気
 をうまく出せないということはしばしばあります。そういうときには、自分がよいと思
 う雰囲気の本を手にとり、その本の**文体やスタイルに触れてからつくる**ようにします。こ
 のように、本から「スタイルの継承」をすることで、**目指したい質感を自らの表現にもた**
らすことができるのです。



図 22 「スタイルの継承」

3. 勇気の源泉 (図 23)

創造的な活動には挑戦や飛躍がつきものですが、いつもそういう気持ちでいられるわけ
 はありません。そういうときには、本に込められた**著者の情熱**や、作品の**登場人物の勇敢**
な姿を思い出すことで**勇気をもらい、自らのエネルギーに**することができます。本は、困
 難に立ち向かったり、未知の世界を開拓したりする話の宝庫であり、「勇気の源泉」にもな
 るのです。



図 23 「勇気の源泉」

4. 別の可能性（図 24）

いまの自分の状況や、自分たちが日々過ごしている世界は、当たり前ものではありません。もしかしたら、ちょっとしたことがきっかけで、違う人生や世界を生きていたかもしれません。本で語られていることや描かれている物語は、**いまの自分とは違う「別の可能性」への想像力**を高めてくれます。自分とは異なる立場や視点の話に触れることで、現状の有り難さや、行動・変化のための発想を得ることができるでしょう。



図 24 「別の可能性」

5. 本のデザインから（図 25）

本は、そこに書かれていることがすべてではありません。ページやカバーのデザイン、挿絵や魅せ方、紙の質感、本の存在感、帯のコピーなど、いろいろなものがひとつになって存在しています。そのため、書かれた内容を活かすというだけでなく、**装丁からインスピレーションを得る**ということも、本の使い方のひとつなのです。「ジャケ買い」のように、この本のデザインが好き!というのも、本を手にする理由になります。



図 25 本のデザインから

6. 考えの型（図 26）

捉えどころのないものを理解しようとするとき、そのもの自体をよりよく観察することは大切ですが、何も素手で取り組む必要はありません。そのとき、**他の分野の体系的な理論やフレームワークを武器に、自分の分野を理解するための「考えの型」**として、**思い切って使ってみる**というのも、創造的な読書のあり方の一つです。例えば、生物の免疫システムについての本を読みながら、組織のマネジメントについて考えるというような読み方です。アナロジー（類推）を徹底的に駆使することで、これまでとは異なる捉え方で物事を見ることができるようになります。



図 26 「考えの型」

7. つくる人生（図 27）

「これからは創造的な時代だ」と言われても、これまでそういった考えのもと生活してきたわけではないので、どうしたらよいかわからない、というのが正直なところかもしれません。たしかに一人ひとりが日常的に創造性を発揮するという時代は始まったばかりですが、これまでに創造的に生きてきた人たちはいました。そのような人たちの**創造的な活動の日々や生き様が語られている本を読むことで、自分なりの生き方を形づくる**ことができます。読書を通じて、「つくる人生」を自分なりにつくっていくのです。



図 27 「つくる人生」

8. 世界の流れ（図 28）

今、私たちが生きているのは、どのような世界なのでしょう。今何が起きているのかを知るためにニュースに触れているわけですが、その多くは速報的で短期的な情報です。そ

これから一歩身を引いて、中期的な、あるいは長期的な時代の変化や動向をつかむために、本を活用することができます。本に書かれていることから学ぶということももちろんですが、**本屋に並ぶ本を見ていく**ことで、今どのような本が出版され、どのような本が話題になっているのかを知ることができます。



図 28 「世界の流れ」

9. 未来のかけら（図 29）

これからの未来はどうなっていくのでしょうか。それはまだ誰にもわからない、答えの決まっていない問いです。しかし、未来は突然湧いて出るものではなく、現在とつながっているというもたしかです。そこで、**いろいろな本のなかから未来の萌芽を感じさせる「未来のかけら」を見つけ出し、それをもとに未来のヴィジョンを描く**ということはおすすめの方法です。これこそが、創造的読書の究極のかたちであり、創造的に生きていくための土台となるのです。



図 29 「未来のかけら」

3. 活用

本論文で紹介した 27 の言葉のうち、《本との先約》《本がきっかけ》《発想の素材》《スタイルの継承》《未来のかけら》の 5 つの言葉はカードとしおりを作成し、2017 年に開催された第 19 回図書館総合展にて配布した（図 29）。



図 29 パターンカードとしおり

また、実際にパターンを用いて、読書のしかたを語ることができるかを検証するとともに、活用の可能性を探るため、カードを用いて対話のワークショップ (Iba, 2012) を実施した (図 31)。ワークショップは、総合展において開催したフォーラムの参加者および共同研究先である株式会社有隣堂のブースの来場者、あわせて 200 名ほどを対象として行い、27 パターンの中から好きなパターンを用いて近くの人と 10 分ほど読書の経験について語ってもらった。



図 31 対話のワークショップの様子

その結果、参加者からは、「とても刺激的な時間で、パターンがコミュニケーションのツールとして機能していることを実体験できた」、「本を読んでどんないいことがあるのかと言われた時、このワードを見てもらえば、読んでみようかなという気にきつとなってくれらるだろうと思った」という感想が得られた。それぞれのパターンに関する自分の経験や、やってみたいことなどを共有してもらうことで、他者の多様な読書のしかたを発見したり、人に読書の話をしたりする際の「認識のメガネ」や「対話のメディア」として機能するということが言えると考えられる。

また、読書があまり得意ではないけれど読みたいと思っている人からも、「ラフに読むとか、自分の本棚とか、今まで考えたことがなかった。もう一度、読書にチャレンジしてみ

たいと思う」という感想が得られている。「本屋に行って、自分の本棚に入れるべくいろんな種類の 5 冊の本を購入し、夜寝る前の時間に本との約束をして、その時の気分に合わせて読みたい本を、分からないところはラフに読み飛ばしながら、読書を楽しめている」のような実践につながった例もあり、読書に親しむきっかけになることも期待できる。

さらに、カードやしおりは対話のツールとして用いることはもちろん、パターン・オブジェクト (Iba, *et al.*, 2016) としても活用することができる (図 32)。



図 32 パターン・オブジェクトとしての活用例

創造的読書のパターン・ランゲージは、本にあまり親しまない人が読書をするきっかけをつくることを目的に作製されている。そのため、27 パターンは冊子の形式でまとめるのではなく、すべて短い文章でまとめ、表現することに挑戦した。さらに、本を普段手に取らない人にも届きやすいように、カードやしおりを作製した。写真のように部屋に飾ったり、読んでいる本に挟んだりすることもできるため、生活の中でパターンが目に触れる機会を増やし、実践につなげることを支援する。また、メインターゲットであるあまり本を読まない人だけではなく、本を読む機会の多い人が読書のしかたや楽しみ方を周囲に語るためのキーワードとして用いるための、「経験を語るツール」としての活用も期待される。

今回行ったワークショップの参加者は大多数が出版に関わっており、本や読書に対する関心がもともと高いと推測される。本に親しんでいる人が経験を語りやすくなることは考えられるが、本を読む機会の少ない人を巻き込み、読書推進の新たなアプローチとして機能するかどうかは引き続き検証が必要である。今後は、中・高校生や大学生など本を読む機会が減っている世代や、読書に時間を割くことが難しくなる社会人を対象に、司書や学校の先生、書店との連携を通じてワークショップや授業でのパターンの活用を進めていきたい。

4. 結論

本研究において、私たちは創造的読書のパターン・ランゲージを作製し、「多様な読書のしかた」を捉えることに挑戦した。作成したパターンはカードやしおりを作製・配布し、

図書館総合展ではそれらを用いて対話のワークショップを実施した。さらに、慶應義塾普通部では、パターンを取り入れた読書の授業が実験的に始まっている。読書のコツについてのパターンから 1 つを選び、そのパターンについてグループで話し合ったのちに自由に読書をするという授業である。

この授業を受けた学生からは、「好きな『本の読み方』について皆で話し合った。トイレで読むという意見が出たとき、ああ、なるほどと深く共感した。その後は自由に読書ということだったので、自分にとっての一番の本の読み方、寝ころびながら読む、ができる場所を探しに図書室内をウロウロ。友人が座っていたソファに便乗させてもらうことにした」という意見があり、今後の展望として中学校や高校における授業内での活用を検証していきたい。

これまで紹介してきた実践から、創造的読書のパターン・ランゲージは、読書そのものについての体験をひらき、自分の生活に取り入れたり、他者と共有したりすることを支援することができると考えられる。さらに、この 27 パターンがあることでさらに上級のなパターンや経験を引き出すこともできると考えられるため、今後も軸足を変えつつパターンを増やしていきたい。

本は必ずしも読まなければいけないものではない。しかし、本を読むことで得られるものもあるだろう。作家の村上春樹は、自身の読書体験について次のように述べている。

「もし本というものがなかったら、もしそれほどたくさんの本を読まなかったなら、僕の人生はおそらく今あるものよりもっと寒々しく、ぎすぎすしたものになっていたはずだ。つまり僕にとっては読書という行為が、そのまま一つの大きな学校だったのです。」(村上春樹、2015, p.210)

読書のコツ、読書の楽しみ方、創造的読書といった様々な側面から「本を読む」ということについての言葉が増えていくこと。そこから、「本のある生活」の入り口はひらかれていくのである。

謝辞

本論文で取り上げた「創造的読書のパターン・ランゲージ」は、慶應義塾大学 井庭崇研究室と株式会社有隣堂との共同研究の成果として作成されたものです。パターンの作製に尽力して下さった小石浩貴さんをはじめ、株式会社有隣堂の方々に心から感謝を述べたいと思います。そして、プロジェクトメンバーとして共に活動した石田剛さん、吉川文夏さん、新田莉生さん、村上航さん、加藤日向さんにも感謝します。また、インタビューのなかで、さまざまな読書のコツや楽しみ方の種を共有して下さったみなさま、本論文へ助言いただいた井庭研究室のメンバーにも感謝いたします。最後に、シェパードとして本

論文をよりよくするために導いてくださった羽生田栄一さんにお礼申し上げます。コメントをいただくなかで、論文だけではなく、パターンの今後の展開についての視座も得ることができました。ありがとうございました。

参考文献

Alexander, C., Ishikawa, S., Silverstein, M., Jacobson, M., Fiksdahl-King, I. and Angel, S. (1977), *A Pattern Language: Towns, Buildings, Construction*, Oxford University Press, New York. (クリストファー・アレグザンダー他、『パターン・ランゲージ：環境設計の手引』, 鹿島出版会、1984 年)

青山南・文、阿部真理子・絵 『眺めたり触ったり』、早川書房、1997 年。

浅田彰 『逃走論—スキゾ・キッズの冒険』、筑摩書房、1984 年。

井庭崇 編著、中埜博、江渡浩一郎、中西泰人、竹中平蔵、羽生田栄一 『パターン・ランゲージ：創造的な未来をつくるための言語』、慶應義塾大学出版会、1984 年。

井庭 崇、2014、『創造的な対話のメディアとしてのパターン・ランゲージ：ラーニング・パターンを事例として』、*KEIO SFC JOURNAL*, Vol.14 No.1, pp.82-106.

Iba, T. (2015) “Pattern Languages as Media for Creative Dialogue: Functional Analysis of Dialogue Workshops” in *PURPLSOC: The Workshop 2014*, eds by Peter Baumgartner, Richard Sickinger, Berlin: epubli, pp.236-255.

井庭 崇、梶原文生 『プロジェクト・デザイン・パターン：企画・プロデュース・新規事業に携わる人のための企画のコツ 32』、翔泳社、2016 年。

松岡 正剛 『多読術』、筑摩書房、2009 年。

三木清 『三木清教養論集』 大澤聡編、講談社、2017 年。

文部科学省 「子どもの読書活動推進ホームページ」、インターネット、http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/suisin/index.htm

村上 春樹 『職業としての小説家』、スイッチパブリッシング、2015 年。

ニクラス・ルーマン 『社会システム理論』、恒星社厚生閣、1995 年。

岡崎 武志 『読書の腕前』、光文社、2014 年。

大澤真幸 『考えるということ—知的創造の方法』、河出書房新社、2017 年。

ショウペンハウエル 『読書について 他二篇』、岩波書店、1960 年。